
真夜中の烏

アザトーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夜中の烏

【Nコード】

N2288Z

【作者名】

アザとーさん

【あらすじ】

落ちこぼれ死神が地上に降り立った。

彼女の使命は人間の『喜怒哀楽』を回収することなのだが……

始まりの夜

始まりの夜

申し分のない月明かりが、その夜を明るく照らしていた。こんな夜には、人ならざる者たちが宵闇の中に降臨する。今まさに、一人の少女が地上に足をつけようとしていた。背中には巨大な鳥の翼が生えている。漆黒のソレは、異界より羽ばたき続けて疲れ切ってはいたが、ふわりと優しく地上に降り立った。

「よう、クルエボ。相変わらず美しい羽根だな。」

コウモリの羽をひらめかせて隣に降り立った少年に、彼女は感情の無いガラス玉のような瞳で答えた。

「ここではその名前は不自然だ。『小夜子』と呼んでくれ。」

「小夜子ちゃんねえ。美しい名前だな。俺にもこっち風の名前、つけてくれよ。」

「『チャラ男』」

少女はそれだけ言い放つと、少年への興味を全く失ったかのようにそっぽを向き、何かをつぶやき始めた。その小さな唇の中であらしが吹き荒れるような音がもれ、巨大な翼がみるみる内に縮んで……ついには消えた。

翼を持たない姿は、どこにでもいるごく普通の少女と何ら変わらない。ない。

よほど構って欲しいのか、その『変身』をじっと見ていた少年が、再び口を開いた。

「しかし、めんどくさい事させられてんな。人間の『喜怒哀楽』を回収するんだっけ？」

「仕方ないだろう。人間の魂は、その大半が感情と言う成分でできている。だが、私にはいまだに『感情』というものが理解できない。

「そうだな、だから落ちこぼれたんだもんな。」

ストリートな悪口にも、少女はその美しい眉ひとつ動かさない。

「まあ、どうしてもダメなら？俺が嫁にもらってやるよ。」

「ありがとう、チャラ男。そうならないように善処する。」

「つれないねえ。ま、俺はその辺で適当に仕事をしてるから、困ったことがあればすぐに連絡してくれよ。」

「仕事は適当にやるものじゃない。」

「はいはい。『善処します』よ。」

少年はいかにもチャラいしぐさで、ひらひらと手を振って飛び立った。

すでに都会のネオンを移している彼女のガラスの瞳には、そんな彼の姿は映らなかった。

第1章 「喜」

小夜子は、夜のネオン街の喧噪の中をあてどなくさまよっていた。男たちは好色の眼差しで彼女を振り返るが、その神々しいまでの美しさに声をかけあぐねていた。

雑踏のにぎわいの中でも、小夜子を包む静寂が破られることは無かった。突如、勇者という名のKYが現れるまでは。

「かゝわいいね、何ちゃん、何ちゃん？」

男は酒臭い息を小夜子に吐きかけ、なれなれしく肩を抱き寄せた。

「小夜子ちゃんだ。」

彼女の答えは全く何の感情もこもっていない。質問に答えを返しただけの味気ないものだったが、その男を有頂天にさせるには十分だった。

「小夜子ちゃん。暇ならあ、カラオケとか、おじさんで行っちゃいませんか？」

「カラオケ……それに行けば、お前は嬉しいのか。」

「小夜子ちゃんと一緒ならあ、どこでも嬉しいよ。ホテルなら、なお嬉しいかな。」

彼女はしばらく黙って、頭の中でその単語を検索する。

「ああ、すまん。『そういう機能』は持ち合わせていないんで、カラオケで頼む。」

「小夜子ちゃんは、商売の人じゃないんだね。オッケー、オッケー。」

「何だか会話がかみ合っていない事すら気にせず、男は小夜子の手を引いた。」

「小夜子、先に歌いなよ！」

狭い密室で気の大きくなった男は、すでに小夜子の隣にぴったりと寄り添い、ご機嫌でマイクを突き付けてくる。

「歌はよく知らん。お前が歌うがいいぞ。」

男は不服そうに口をとがらせた。

「えゝ、歌ってくんないと、おじさんつままない。」

「『つままない』……嬉しくないという事だな。お前はカラオケに行けば嬉しいと言ったのに、嬉しくないんだな。」

「そうだよ。つままないよ。」

「ならば、お前の『嬉しい』とはなんだ？」

男はへらへらと笑いながら小夜子にすり寄ってきた。

「えゝ、女の子とこういう事が出来て、おいしいものが食べられて、後は……車！　かっこいい車とか買えちゃうと、嬉しくなるかな。」

「買えばいいじゃないか。」

「わかってないな。サラリーマンって、そんなにお金持ちじゃないよ。生きていくには困らないけど、贅沢するお金なんかないんだよ。」

「お金……そうか、ここでは何をしてもそれがあるんだったな。」

小夜子は出会ってから始めて、真っ直ぐに男の顔を見た。

「お金があれば『嬉しい』か？」

「そりゃあ嬉しいよ。くれるの？　お金。」

「くれてやる。これを持っている。」

小夜子は小さなストラップを取り出し、男に握らせた。

「あゝ、残念。スマホだから、ストラップは使わないんだよ。」

「ならば鞆にでもつけておけ。」

男は酔いのまわった、どろりとした眼差しでそのストラップを確かめた。何の変哲もないそのストラップのアクセントには、道端で拾ったような地味な黒っぽい石がついている。

「いやー、若いコからプレゼントなんて嬉しいねえ。」

男の瞳が、酔いでさらに淀んだ。

「いいか、肌身離さず持っているよ。」

その声は、深い酔いと眠気にとらわれた男の耳にも強く残った。

(2)

数時間は眠れただろうか……

男はだるい酔いの中から起き上がった。この密室の中には彼女の姿は無い。

「……………」

男は慌てて、ポケットの中身をテーブルの上に並べた。

財布……ある。カードや定期の類も……揃っている。スマホは……

……これは妻を拝み倒して買った、いま一番の宝物だが……ある。

昨夜小夜子がくれた小さな石のついたストラップが、スマホに引っ張られて床に落ちた。

「変わったコ……だったな。」

少し酔いの冷めた今、その会話のちぐはぐさに改めて違和感を感じる。

「これは……捨ててもいいか。」

ストラップを指ではじいたまさにその瞬間、テーブルの上でスマホが激しく振動した。

「もしもし………」

反射的に電話を取ってしまったあとで、男は後悔した。ディスプレイに表示されているそれは、見たこともない番号……。

電話の向こうから聞こえてきたのは、昨夜の彼女の冷静な声。

「それは捨てるな。」

「ええっ、どこかで見てる？」

「見てはいない。人間の行動パターンを解析した結果だ。」
「やっぱり変わったコだ。」

「あのー、昨夜のことなんですけどね。奥さんにばれると………」

「『オクサン』には興味がない。とりあえず、こちらの言うとおりにしる。」

「言う通りにすれば昨夜のことは？」

一瞬、電話の向こうでおかしな間があった。

「ああ、オクサンに言われると困るんだったな。ならば黙っていよう。」

「じゃあ、言うとおりにするよ。何をすればいい？」

「今から言う事をメモしろ。そして、そこに行つて宝くじを買え。」

「はい？」

「宝くじだ。まずはスクラッチから行くぞ。」

男は慌てて、手近にある紙ナプキンを引き寄せた。

電話口から聞こえる彼女も声は淡々として事務的ではあったが、強い強迫観念のようなものを男の中に植え付けた。

メモを片手にカラオケ屋を飛び出す頃には、男はすっかり洗脳されたかのように指示通り、駅ビルを目指して走り出した。

通勤のサラリーマンを狙ったその売り場の朝は、早い。

ちょうどシャッターを開けている売り場のおばちゃんに、男は早口でまくしたてた。

「スクラッチ、バラの、上から三枚目のを！」

おばちゃんは愛想のよい笑顔と、慣れた手つきでくじ券を男に渡した。

男は一気に、柔らかい銀色を削り落す。そこには、同じ絵柄が3つ。

慌てて配当表を見る。絵柄を確認する。そして、驚きの表情を浮かべるおばちゃんの顔を見るに至つて、男は初めてそのことを実感した。

「一等ですよね。」

「はい！おめでとうございます。」

男は改めてあたりのくじ券を、そして、少しよれつとした紙ナプキンのメモを見た。

これはもしかして、本当に？

男の頭からはこれから行かなくてはならない会社のことも、そして、妻に外泊の言い訳を電話しなくてはいけない事も、きれいさつ

ぱり消え去った。

「今日は忙しくなるぞ！」

男は、電車に乗るために走り出した。

もちろん、紙ナプキンのメモに書かれた次の目的地を確かめながら。

(3)

男がメモに書かれた売り場を回り終わる頃には、すでにあたりは夕闇に包まれていた。

やっと興奮のひと段落した彼は、その時初めてポケットの中で着信のメロディーが鳴っている事に気がついた。

電話に出ると、淡々としたあの少女の声。

「お金はたくさんになったのか？」

男のポケットは、現金と当たりくじでふくれあがっている。

「それで、お前の『嬉しい』を買え。」

短い電話はそれだけで切れた。

そのあとの画面には、着信を知らせるマークが浮かんでいる。

「やばい！忘れてた。」

着信画面を開くと、会社から、妻から、会社から、妻から、妻から……

男が電話にすら気付かないほど夢中になっているその間に、着信は限界を超えている。

そして充電も……バッテリー切れの警告音が鳴り、画面が暗くなつた。

「まあ、いいか。」

奮発して、あいつの欲しがっていたブランドのバッグでも買って帰ろう。後は、何だか有名だって言ってたややこしい名前のケーキと……定番の花束かな。

男は、ポケットの中は重く、足取りは軽く歩き始めた。

抱えきれないほどの荷物を抱えた男を玄関で出迎えたのは、山のように積まれた段ボールと、大きな旅行用の鞆だった。

リビングでは、妻がうつむいてソファに座っている。

男が買い物の包みをテーブルの上に置くと、妻は顔も上げずに言

った。

「どこに行っていたの。」

その淡々としたしゃべり口は小夜子を連想させる。

いつそ、キレて罵りかかってくれる方がわかりやすいのに。

男は妻の手にブランドのロゴの入った紙袋を握らせた。

「欲しいって言っていただろ。仲直りのプ・レ・ゼ・ン・ト。」

しかし彼女は夫の存在を全て拒否するかのように、その紙袋を床に置いた。

「今日はどこに行っていたの。」

「会社のことか？心配しなくても、あんな会社やめたっていいんだよ。」

「どこに行っていたかって聞いているのよ！」

同じことを三度も言わされた彼女の怒りが堰を切ったようにあふれ出し、男の浮かれた心を弾き飛ばした。

「昨夜だって2次会の途中で帰ったっていうのに、そのあとは何をしていたの！もう、あなたってば、毎回信用できないようなことばかり……」

「落ち着けて。そんなに怒らなくても、お前が心配するようなことは何も無かったよ。昨夜は。」

「じゃあ、昨夜以外は！」

「だから、悪かったって！反省して、こんなにお前のものばかり買ってきてやってただろ！」

男も大声をあげた。こうなると、二人の間にはもう罵りあいしかない。

激しい口戦に止めを刺すように、妻はひととき大きく叫んだ。

「もう、本当に無理！お金がどうか、物がどうかじゃないの！無理、無理、無理！」

逃げるように玄関を飛び出していく彼女を、男は追い掛けることさえしなかった。

「無理なのは俺の方だよ！これだけ金があれば、女なんか選び放題

「なんだからな。」

男の悪態を受けるべき妻の姿はもうそこには無い。

男は件のストラップを恭しく取り出し、大事そうに撫でまわした。

「さあ、幸運の女神ちゃん、また電話してきてくれよ。」

ストラップに付けられている石の表面に、紅い輝きがほんの一瞬、走った。

(4)

翌日から男の生活は一変した。

小夜子から定期的にかかってくる電話はいつも事務的ではあったが、その指示に従ってさえいれば株でも、ギャンブルでも、彼の手元に莫大な富をもたらすものだった。

金があれば女は蠅のように群がってくる。彼は躊躇することなく、妻から送られてきた離婚届に判を押した。

派手な車を取り返し、女達をはべらせるようになった彼にとって、家はただ寝に帰る場所にすぎない。

その日もゴージャスに遊びまわった彼は、疲れた体を横たえるためにドアを開けた。

誰も返事する者がいなくなつてから、彼は『ただいま』を言わない。機械的に鍵を閉め、靴をだらしなく脱ぐだけだ。

男はリビングに明かりを入れ、ソファにその身を投げ出した。いつものように、小夜子からの電話が鳴る。

彼女の電話は、まるで見ているかのように、彼が一人になった時だけかってくる。

今日も彼女の声は事務的だが、男はとびきりの愛想で応えた。

「はいはい。次は何で儲けさせてくれるんですか。」

「次は、そのストラップを回収させてもらう。」

男の背中中、不安がぬるりと動いた。

「ストラップ？まさか、返しちゃったらもう電話してくれない、なんてことは無いよね。」

「電話はもうしない。」

「返さなかったら？」

「返さなくても、結果は同じだ。どうせお前は、もう電話に出ることはできない。」

理由のない不安が、ぬるりぬるりと体中を這いまわる。

「電話に出ることができないって、どういう事？」

「今夜、お前は死ぬ。」

声が電話からではなく、すぐ耳元で聞こえた。

男は恐怖という反射で振り向いた。

「ストラップをこちらに。」

そこには電話を耳にあてた小夜子と、もう一人、チャラそうな少年が立っていた。

少年の背中には本来なら羽を持つ唯一の哺乳類についているべき、あのいやらしいハネが、その体にふさわしい大きさに拡大されて生えている。骨ばって、薄い膜をまとったそれは悪魔をほうふつとさせる。

「おまえら、何者なんだ！」

「何者？こつちの言葉で言つと……デイオス？ハロス？」

少女は美しい唇の中で呟きながら少し考え込んだ。

「……ああ、死神……だ。」

「死神！」

ハネを生やした少年がげらげらと笑いだした。

「ダメだよ、そんなストレートに言っちゃあ。それに、お前は正式な死神じゃないじゃん？」

「そうか、すまん。次は気をつける。」

男の腰から下が恐怖でがたがたと震えだした。

「じゃあ、俺が死ぬってのは！」

「ああ、ごめんね。上の決定だから、クレームは俺じゃなくて上に言ってね？」

少年が柔らかな笑顔を浮かべた。

「でも彼女のおかげで、死ぬ前にいい思いできたじゃん？あんたらツキーだよ。」

二階のどこかで、ガラスが割られる音がした。

「助……助け……」

「すまないな。私にはそこまでの権限は与えられていない。」

男の脚はまるでその機能をすっかり失ってしまったかのように動かない。

その間にも、何者かがバタバタと二階を物色している。

「じゃあ僕たちは『全て』が終わったところにまた来るよ。エンジヨ
ーイ」

少年が小夜子の肩を抱き、飛び上がる。

「待……待って……」

差し出された男の手は、二人が消えた空を虚しくつかんだ。

二階を歩きまわっていた強盗たちの足音が階段を下りてくる。

そのリズム感の狂った葬送曲が男の最期を華々しく彩った。

小夜子は血だまりの中からストラップを拾い上げ、そで口で血を拭った。

ストラップの石が、暗い赤に染まっている。それは床の血だまりを吸い上げたような痛々しい輝きを放つ朱だ。

「これが……喜び？」

血だまりの主は強盗に刺された傷口をさらしたまま、すでに答えることはない。

「もつときれいなものなのかと思ったのだがな。」

少年は彼女の手元を覗き込んだ。

「一応『喜びの赤』は出ているようだし、いいんじゃないかな。」

「そうか。」

小夜子はストラップを乱暴にポケットに突っこんだ。

「次は『怒りの黄色』の回収に向かう。」

「おお？もう行くのか。俺はこいつの魂を回収しないといけないから、一緒に行ってやれないぞ。大丈夫か？」

彼女は何も答えずに彼に背を向けた。

その美しさゆえ、無表情ゆえにその行為は怒っているようにも感じられる。

彼は思わずその背中に声をかけた。

「クルエ……小夜子、人間を見る！もつとちゃんと人間を見る！」

第2章 「怒」

その男は怒っていた。

「トロい運転しやがって！」

強くアクセルを踏み込み、愛車の鼻先を前の車にすりつけるようにあおった。

何がそうさせるのか。あえて言うなら『若さ』というものだろう。夜道をとるとと走る車は左にウィンカーを出し、大きく道を譲った。

「よし、それでいいんだよ！」

アクセルをほぼベタに踏み込み、ポンコツ運転を大きく引き離す。このままどこへと聞かれれば、特にあてがあるわけでもない。ただ、若さゆえに胸の内にたまった得体のしれないこの怒りを、路面にぶちまけたい気分だ。

誰もいない田舎の直線道を、男はメーターが降りきれるほどに飛ばしていた。

「……！」

ヘッドライトが描く光跡のハジに、可憐な少女の姿が照らし出される！

足をつっ張ってブレーキをかける！

車は叫ぶようなブレーキ音をあげて軋む。

ドン！

みるみる近づいてきた少女の体がボンネットの上を転がり、男の体は衝撃で跳ね上がる。

車は……やっとなまった。

「あーあーあー、畜生！こんな夜中にふらふらしてんじゃねーよ！」
ドアを乱暴に開けて車のフロントに回り込むが、ボンネットにもバンパーにも事故の形跡は何一つ……傷一つついてはいない。

「……？」

男は弾き飛ばされたはずの小柄な体を目線で探した。

暗いとはいえ、路面は街灯に寒々しく照らされている。だがそこに、倒れているはずの少女はいなかった。

「おいおい……勘弁してくれよお。」

地面に膝をつき、車の下を覗き込む。だが、そこにも彼女の姿は無く、エンジンの熱気を冷たい夜風が吹き飛ばした。

「まさか、お化け……」

「そんな非現実的なものはいない。死は全ての人間を等しく『無』に帰すからな。」

小夜子が彼の背後から声をかけた。

振り向いた彼の眼にはその姿がお化け以上に非現実的に見えた。

はねられたはずの体には傷一つなく、街燈の明かりに照らされた美しい姿はほのかに光を発しているようにさえ思える。

「今、はねた……」

「そうか、怪我ぐらい作っておけばよかったな……」

ちよつと何かを考えているような間があいた。

「心配ない。私はこの通り、はねられてはいない。」

「そんなバカな！だって、すごい衝撃があつたぞ。」

「あれだけのスピードだ。急ブレーキをかければ衝撃もハンパ無いのは当たり前だ。」

「じゃあ俺は、ただ単にブレーキを踏まされただけか。」

事故の責任を負わなくてもいいという身勝手な安堵が、彼のやり場のない怒りの炎を掻き立てた。

「車道は車が走る所なんだよ。ふらふらとガキが歩いてんじゃねえよ！」

「そうか、すまん。」

「あんな急ブレーキかけさせやがって！車にガタが来てたりしたら、弁償させるからな。」

「お前は、なぜそんなに怒っているんだ。」

「はあ？お前みたいなバカガキがふらふらしていると、みんなが迷惑

するからだよ！」

「『みんな』じゃない。『自分が』だろう。」

小夜子の鋭いほどに美しい瞳が男から言葉を奪った。

「『怒る』とはそういうもののなのか。」

小首をかしげてじつと男を見つめる小夜子の背後を、ざあつと夜の風が通り過ぎた。

風に乱れた髪のせいなのか、その強い眼差しのせいなのか。男は小夜子が恐ろしいもののように思えた。

「帰る！俺はお気楽なガキと違って、忙しい身だからな。」

急いでその場を去ろうと、踵を返す男を小夜子が呼びとめた。

「待て。これを持っていけ。」

それは天然石のブレスレットだ。メンズサイズに組まれた大きめの石は渋い色ながらも質のいい輝きを放っている。ただ一つ、中央の小さな石を除いては……

その石だけが明らかに異質だった。つやもなく、輝きも持たず、暗いグレーに沈んだそれは道端で見かけるようなただの石だ。

だが、その石の存在が男の心を強く引き付けた。

「これは、おわびのつもりか？」

「そう思ってもらっても構わない。」

「じゃあ、もらってやるよ。でも、これでチャラじゃないからな！」

「まだ何か欲しいのか。」

「だから、修理代！それに普通はお詫びって言えば菓子折りだろ！」
「わかった。それは明日にでも届けてやろう。その代わり、それをつける。」

男はそのブレスレットを腕に通した。

街燈にかざして見ても、輝く石に囲まれた地味な石は灰色に濁ったままだ。

……まるで、俺自身のようだ……

男は自嘲の笑顔を振り払うように頭を大きく振って、振り向いた。
「これでいいだろ。」

そこには、
すでに小夜子の姿は無かった。

「2」

翌日、男はコンビニのレジで『愛想』を売っていた。

目の前の客はもう三十分もわめき続けている。

男は怒りを腹に押し込み、笑顔を装備した。

「申し訳ございませんでした。」

何度こうして頭を下げただろう。そして、すでに退勤の時間を大幅に過ぎた俺は、いつ帰れるのだろうか……

ふつふつとした怒りと戦いつつ、男はさらに深く頭を下げる。

彼が店で笑顔の仮面を脱ぐことは無い。それも仕事の内だという事は重々承知だ。

たとえ同じ話を延々とリピートするクレーマーに会おうとも、決して笑顔を崩さない事がプロの証だと彼は考えていた。

「ともかく、返金してもらえらるんだろぅね!」

クレーマーはやつと終わりの言葉を口にした。

「はい、そのように対応させていただきます。」

男は手早くレジを繰った。

「本当に申し訳ありませんでした。今後はこのようなことが無いよう……」

「いいよ!もう二度と来ないから。」

客はマニュアル通りの詫びの言葉を終わりまで聞こうともせず、大股で店を去った。

男はもう一つのレジを打っている若いバイトに声をかけた。

「こっち、終わったから。おれ、もうあがるから。」

「あゝ、お疲れっす。」

男は気の抜けた挨拶を終わりまで聞こうともせず、大股でその場を去った。

更衣室に飛び込み、引きちぎるように制服を脱ぎ捨てると、ポケットに入れておいたブレスレットが床に転がり落ちる。

男はそれを拾い上げ怒りのままに壁に投げつけようとした。

だが、大きく振りかぶった腕を振り切ることはしない。

いくら更衣室とはいえ、ここはまだ店の中だ。

男は、その中で一番輝いて見える石をパチンと指ではじいて、荒れ狂う心を慰めた。

「3」

帰りの車を走らせながらも、その胸にともった怒りが静まることは無かった。

彼がストレス発散のために向かう先……それはカラオケや、居酒屋なんて小洒落たものじゃない。内向的で下戸の彼は、それらに心癒されることは無かった。

まして、スポーツで怒りを燃やしつくしてしまうなんて事もない。彼が向かったのは車道からは少し奥まった林の中。そこは不法投棄でがらくたがあふれかえったゴミゴミとした空間だ。

「おお、これがいい！」

今日の彼の獲物は、右手が外れているくせにつんと澄ましたマネキン人形だ。

両手でその足首を持って振ってみると、程よい運動量と破壊力がその腕に伝わった。

「ったく、ふざけんじゃねえよ、あのクレイマーが！」

手近な冷蔵庫にマネキンを振り下ろす。

ゴボン！

いやな音がして、その澄ました顔が大きく砕けた。

「みんなして俺をバカにしゃがって！」

同期たちが次々と本部勤めに上がって行く中、彼だけがいつまでも小店舗勤めの一社員のままだ。

ガゴン！

マネキンの肩から上が不自然に曲がった。

「だいたい！あのバカ店長めが……」

クレイマーに必死で頭を下げているその間、あいつは休憩室に隠れていやがった！

その怒りはマネキンの頭部を完全に砕きとばした。

周りに罵りの言葉と破壊をまき散らしながら、男は狂ったように

暴れ続けた。

男が呼吸で肩をはずませながら立ち止まった時には、かつてマネキンだったそれはむき出しになった骨組と、砕け残ったFRPの塊になり果てている。

それを満足げにゴミの山に放り込み充足のため息をついたそのとき、男は今まで気付かなかった『人の気配』を感じて振り向いた。

「……！」

そこには、風呂敷包みを下げた昨夜の少女が立っていた。

「もういいのか。」

いつからそこにいたのかは知らないが、男の破壊行動を見ていたにもかかわらず、その美しい顔は凍ったように動かない。

男はそれが蔑みなのか、ただの無表情なのかを読みあぐねていた。

「それは楽しいのか？」

彼女の声に責める感じは一切ない。ただ事実確認をするためだけの事務的な口調だ。

だが男には、それが責めの一言のように感じられた。

「なんだよ。俺を警察にでも連れて行こうっていうのか？それとも『アブない人』だって誰かに言いふらすのかよ。」

「私は、楽しいのかを聞いているだけだ。」

男はやっと彼女の無表情はただの無表情であり、質問には質問以上の意味は無い事に気付いた。

「楽しくてやってるわけじゃねえよ。」

「では、怒りがすつきりするのか？」

「まあ、多少はな。」

「不可解だな。」

彼女の質問は終わったようだ。

今度は男が疑問を投げかける。

「お前は、なんでここにいるんだよ。」

「それは哲学的な質問なのか？」

「哲学的？俺はただ、この場所にいる理由を聞いたただけだぞ。」

「理由か。お前がここににいるからだ。」

「ストーカー？」

「違う。観察はさせてもらっているがな。」

「そういうのをストーカーって言っただろうが！」

「違うぞ。べつに私は、お前に恋愛感情を抱いてはいないからな。」

微妙に会話がかみ合わないもどかしさに、男は軽い怒りを覚えた。少女はそんな違和感さえ気にせず、手もとの風呂敷包みを男に差し出した。

「なんだよ、それは。」

「カシオリだ。あと、これはシュウリダイだ。」

少女はポケットから帯封がついたままの諭吉を無造作に取り出し、風呂敷の上にポンと置いた。

「足りるか？」

足りなければもつとくれるつもりか？ただのおかしいガキかと思っていたけど、こいつ、一体何者なんだ。

男は恐怖を隠すかのように、ぞんざいな態度でそれを受け取った。荷物を渡して身軽になった少女はくるりと踵を返し、歩き出した。

「おい、観察とやらはいいのかよ！」

そのあつさりとした態度に男の方が思わず聞いてしまった。

「お前のプライベートには興味がないんでな。」

小夜子は振り返ることも、立ち止まることもしなかった。

「じゃあ、俺の何に興味があるんだよ！」

「怒り。」

ざあつと林を吹き抜ける風が、その声を男の耳に届けた。

「4」

次の日も、彼はコンビニで愛想を『売って』いた。

ニコニコと笑顔でレジを打つ彼の耳に、耳障りな怒声が聞こえる。振り返ると隣のレジでは、弁当の空き容器を振りかざしたおばちゃん、若いバイト君を怒鳴りつけている最中だ。

「だから、ここの店で買ったものだって言っているでしょ！」

男はグツと笑顔に力を込めた。

「お客様、お話は私がお伺いいたします。」

その声に、おばちゃんはバイト君から男へと標的を移した。

「ここで買った弁当、腐ってたんだけどねえ！」

「失礼ですがお客様、そちらはいつお買い上げのものですか？」

「そんなこといちいち覚えてないわよ！だから、レジやってた人を呼んでて言うてるの！覚えているはずだから。」

言うてることがむちゃくちゃだ。こっちの都合なんて一つも考えちゃくれない。

それでも、彼はプロとしてのプライドと、その笑顔だけは決して崩すつもりはなかった。

「レシートはお持ちじゃないですか？基本的に返金の際は……」

「レシートはもらわないの。財布がパンパンになっちゃうでしょう。」

「おばちゃんはこちらの話を聞く気は毛頭ないようだ。早口気味にまくしたてる。」

それは店への苦言に始まり、旦那の愚痴、店の話に戻ったと思ったら、今度は近所付き合いの愚痴……とりとめがない。

彼はその笑顔に、よりいっそうの力を込めた。

「失礼ですが、お客様……」

それにつづく言葉は彼にとっては全くの予想外。おそらく、その場にいる誰にとってもそうであっただろう。

「レシートがなきゃあ確認の取りようがないだろうよ。常識もないのかよ。」

店内の空気が一瞬にして凍りついた。おばちゃんはアホみたいに口を開けたまま、立ちつくしている。

男の表情が笑顔のままひきつった。

「その弁当だって、冷蔵庫に入れたまま忘れてただけだろ。いくら防腐剤まみれだって、それじゃあ腐るのは当たり前だろうが！」

店では決して見せなかった彼の本音が今、それを押しこめていた腹の中からあふれて逆流している。

「あほみたいにこつち見てんじゃねーよ。お前も、お前も、おまえもだ！」

口では悪態をつきながらも彼のプライドだけが、かろつじて笑顔を保っていた。

騒ぎを聞きつけた店長が奥からひょこつと顔を出す。

「無能店長！ やつとお出ましかよ。いつもいつも、面倒事は俺に押しつけやがって……」

男は固く口を押さえ、カウンターを飛び越えた。

もはや笑顔は砕け散り、男は泣き顔だ。

店を飛び出し、走る。

すれ違う人にぶつかり、よろよろと車をよけながら……彼がたどり着いたのは駐車場の、自分の車の前だった。

「5」

「終わりだ……何もかも。」

プロとしてのプライドと、笑顔という装備を打ち碎かれ、おそらくはこれからクビになるであろう彼はボンネットに取りすがるようにして泣き崩れた。

涙とともに、彼の本質である『怒り』があふれ出す。

「畜生、もう知らねえよ、あんな店！」

ボンネットに……もちろん隣の車のボンネットに、怒りを強く蹴りこむ。

バオン！とボンネットがたわみ、微かに傷がついた。

これじゃ足りない……男は車を破壊するにふさわしいエモノを探そうと、振り向いた。

「……！」

そこには昨日と同じように小夜子が立っていた。

相変わらずの無表情で、男を責めるでも憐れむでもなく『見ている』だけの小夜子。

今日は一人ではなく、へらへらと意味不明に笑う少年を傍らに從えている。

「なぜ、自分の車を蹴らない？」

「彼は冷静だからだよ、小夜子ちゃん。怒っているように見えても、ちゃんと自分が損しないように計算できるぐらいに、ね？」

男は少年が背中に掲げた悪魔的なハネに心をとらわれ、答えるどころではないようだ。

小夜子に対して幾度か感じた恐怖の正体が、いま目の前にある。

「あれは、お前の仕業かよ！ふざけんな……」

言葉とは裏腹に、彼は震える膝でじりじりと後ずさった。

「私は何もしていない。それが限界を迎えたただけだ。」

小夜子が指差したブレスレットの真ん中で、あの地味だった石が

強い輝きを放っていた。

鼻先に近づけるようにしてみると、石はまるで男の心の中から吸い上げたように、ねとりとした膿にも似た黄色に変わっている

「なんだよ、これ、気持ち悪い！」

男はブレスレットから素早く手を抜くと、それを小夜子に投げつけた。

「お前ら、俺をどうする気だよ。殺すのか？」

少年がオーバーリアクションでそれに答えた。

「殺すなんてとんでもない。僕らは、運命に書きこまれた死の瞬間に立ち会っただけさ。」

「死の……やっぱり俺を殺す気じゃねえか！」

「だから、殺さないってば。僕らの仕事は、君の魂を回収する。ただそれだけ。」

「回収？俺の魂をどうする気だよ。」

「んー、企業秘密だから詳しくは言えないんだけど？とある工場で細かく砕かれて、再利用するんだよ。」

小夜子の形良い唇が抑揚なく動いた。

「心配するな。死は全てを等しく無に帰す。」

男の体が恐怖に突き動かされた。車に飛び込み、素早くエンジンをかける。

「いやだ……死にたくない！」

男は死神たちから逃げようと、アクセルを踏んだ。

車は怒ったように急発進したが、少年は小夜子をふわりと引き寄せてそれをかわした。

勢い余った車が駐車場の中でぶつかり、ほかの車をなぎ倒し、小さな炎を吹く。

男の人生のラストシーンが炎に包まれていく中、すでに彼に対する興味を亡くした小夜子は、手の中の黄色い石をじっと見つめていた。

「これも、きれいと言い難いな。」

「でも、ちゃんと『怒』の黄色だし。大丈夫、大丈夫、
小夜子はただ、じっと石を見つめていた。」

第3章 「哀」

けだるい静寂が支配する深夜のファミレスに小夜子はいた。
件のチャラ男はきちんとハネをたたみ、まったく普通の人間のよ
うな顔をしてテーブルの向かいに座っている。

だが小夜子の関心は少年を飛び越え、少し離れた席に座っている
一人の若い女に注がれていた。

テーブルの上を使用済みのグラスで埋め尽くしながら、女は同席
の友人に繰り言を垂れ流している。人間とは異なる聴覚を持つ小夜
子には、そのすべてが聞こえた。

「もう、彼といるのは疲れちゃったの……」

彼女の話は彼氏の浮気と暴力と、それに耐え続ける自分のエピソードで成り立っている。友人が「疲れちゃったの」を聞かされるのはすでに8回目だ。そして、次の言葉はこれまた8回目の「でもね、別れられないの」だろう。

それを確認しようとする小夜子の視界を、少年が遮った。

「小夜子ちゃん、あゝんしてみ？あゝん」

ハンバーグの一かけらを小夜子に突きつける。

「そんな臭いものはいらん。」

「バカだねー。これはおいしそうな匂いって言うんだよ。」

少年は自分でそのハンバーグを頬張った。

「お前は、本当に人間の真似をするのが好きだな。そして、人間をよく知っている。」

「真似をするからよく知ってるんだよ。ほら、あゝん」

今度は小夜子も素直に口を開けた。

「ふむ。タンパク質と脂質の味だな。微量組成のアミノ酸は……」

「うまいって言いたいのか。かわいいねー。でも、人間の言う『うまい』ってのはそういう事じゃないんだよ。」

「……不可解だ。」

カップルと勘違いしたのか、店員が気恥ずかしそうにラストオーダーを聞きに来た。

「追加は無い。結構だ。」

店員はぺこりと頭を下げると、愚痴を言っている女のテーブルに向かった。

少年は咀嚼していたハンバーグを飲み下す。

「今度はあの女が……でもあれ、ただの『可哀そう女』じゃん？」

「可哀そう……それは『哀しい』とは違うのか？」

「まあ違うっちゃあ違うし、似てなくもないけど……」

「違うものなのだな。じゃあ、どう違うのか教えてくれ。」

「説明できるもんじゃないんだよ。そうだなあ……成分とか組成とか言わずに、『うまい』って言えるようになればわかるんじゃないか？お前にも。」

「また不可解な事を言うんだな。」

「そうだな。不可解だな。」

少年はそれ以上の答えを小夜子に与えはせず、ハンバーグの残りを口に放り込んだ。

(2)

彼女は十分に哀しい女だ。

ともかく男運がない。初めは優しい顔をして近づく男たちは、しばらくすると必ず浮気か暴力で彼女を苦しめる。親切な顔をして相談に乗ってくれる男も結局は体目当てで、一度寝ては捨てられる。

彼女の男遍歴はその経験値とは裏腹に、実りの無いものだった。

そしてイマ彼も……彼女は今、彼のマンションの真下にいた。

見上げると二階の彼の部屋の窓には、温かな光がもっている。

夜風に冷えた体を温めてくれるそのぬくもりに向けて、彼女は携帯をかけた。

電話に出た男の声には、軽い違和感の香り。

「どうしたんだよ、こんな時間に……」

「あのね、友だちとお茶してたら終電終わっちゃって。今から行ってもいいかな？」

「今？今……今からはまずいな。」

「どおして？」

「えーと、武田！知ってるだろ、後輩の武田。今あいつン家についてさあ、家行っても誰もいないから！」

「ふーん。そうなんだあ」

「そうそう！だから無理。ごめんな。」

見上げた窓の明かりが白々しく消えた。

彼が決して合鍵をくれなかった意味を、そして、訪問の前には必ず電話させるその意味を彼女は薄々気づいていた。そして、あの温かい光が彼女を受け入れなかったその意味も。

携帯をぱたんと閉じた彼女の瞳には、すでに涙があふれていた。

「泣いているのか。哀しいのか？」

いつからそこに立っていたのか、小夜子は女の眼前に突然現れた。その驚きがあふれ出す涙をのみこみ、女は小さく狼狽する。

「何だ、泣かないのか。哀しくなくなったのか？」

小夜子の無遠慮な質問にどうこたえていいのか分からず、女は立ちつくしていた。

「お前は、なぜわざわざ哀しくなることをするんだ？いきなりここにきて拒絶されることを知っているんだろ。哀しいのが好きなのか？」

質問ばかりの小夜子に、彼女のボルテージがパラメータを振り切った。相手は見ず知らずの、しかも年端もいかない少女だという事もお構いなしに、わめき散らす。

「私だって幸せになりたいのよ！なのに、寄ってくるのはあんな男ばかり……哀しいのが好きなんじゃないの！幸せになりたいの！」

「幸せになりたい……のか？」

小夜子の無表情の上にほんの一瞬だけ浮かんだそれは、明らかな困惑の表情だった。

「……本当に何を願っているのかは、石が知っている。」

小夜子は彼女にペンダントを手渡そうとした。

繊細で手の込んだ銀細工のトップは、彼女好みのエンジェルデザイン。だがそこにはめられている石は、銀の輝きには不釣り合いなくすんだ灰色だった。

用心深い彼女は自分好みのそれにも、すぐには手を伸ばそうとしない。

「なにそれ。雑誌の後ろとかによくあるあれ？幸せを呼びます、つてあれ？」

「そういう類のものではないな。付け加えておくと、靈感商法というものでもない。ただ、これをつけて欲しいだけだ。」

「怪しすぎるでしょ！そんな怪しいものいらないわよ。」

「こつちを見ろ。」

突然の小夜子の強い口調が女の心を絡め取った。

「手を出せ。そして、これをつけろ。」

さらに強いそのまなざしが彼女を侵してゆく。

女には、小夜子に逆らうすべは無かった。

(3)

「あんまりそういう『力』を使うなよ。」

女を見送る少女の傍らに、コウモリのハネが降り立った。

「あれを受け取ってもらうためには仕方がないだろう。」

少女は相変わらずの無表情に見える。が、少年はその些細な変化を見逃さなかった。

「もしかして、イラッとした？」

「イラッと……する、か。」

少女は漆黒の瞳を閉じて、頭の中でその単語を反芻した。

「自分の思い通りに行かないときに発生する感情だな。確かに自分の思い通りにはいかない状況ではあったな。」

「そうじゃなくて！『イラッとした』かって聞いているんだ。」

少年は、いつものようにへらへらと笑ってはいなかった。

「お前の質問は……不可解だな。」

小夜子の顔はすでに、完全なる無表情を取り戻している。

「そうだよ。不可解だよ。」

少年は取り繕うかのように、へらつとわらった。だが、少女の堅い表情には何の反応もない。

小夜子は規則正しい歩調で歩きだした。

「あれ、どっか行くの？」

「観察だ。人間をよく見ると言ったのはお前だろう。」

「そうでしたネ。ま、がんばって。」

コウモリのハネが大きくはためき、少年の姿を、星すらも見えない都会の空へと連れ去った。そして、小夜子の足取りは何者にも乱されることなく、その姿を星のように輝く街明かりの中へと連れ去った。

(4)

「不可解だ。」

小夜子がこのセリフを口にするのは、果たして何回目だろう。

彼女は今、ファーストフード店の二階席から隣のビルを覗き込んでいた。

もちろん、人間の視力で考えてはいけない。彼女は隣のビルの、おしゃれなレストランの八番席に座っている女を、ピンポイントで観察している。

女は涙で声を震わせながら、彼の浮気に耐えた日々を若い男に語っている。相手の男は彼氏の仕事の後輩で、実にまじめで実直そうな青年だ。

「昨日も彼つたら、あなたの家にいるなんて嘘を……」

涙ながらの女の言葉に、小夜子は小さな違和感を感じた。その正体を確かめようと、窓に顔を近づける。

窓ガラスに顔をすりつけている可憐な少女の背後で、聞きなれた声がした。

「少しは人間らしい振る舞いつても学んでくれよ。」

ハネを隠し、ハンバーガーを山ほど乗せたトレーを抱えた彼は、どこからどう見ても普通の男子。彼女を待たせたお詫びに、ハンバーガーで機嫌を取ろうとしている彼氏、といった風情だ。

「ああ、チャラ男。いいところにきたな。」

「何が？」

少年は小夜子の隣に陣取ると、一つ目のハンバーガーの包みを開けた。「幸せになりたいと言うから、あの男と会えるように運命を操作した。」

「ふん？なんでカレ？」

「あの男はあの女に好意を持っている。彼女もそれに気づいているようだ。以前に告白があつたのかもしれない。」

少年は二つ目の包みに手をつける。

「それに彼女の話に共感して、腹を立てている。自分なら決して浮気はしないと何度も言っている。彼ならあの女を哀しい目に合わせることがなさそうなのだが？」

「すごいねえ。名探偵みたいだねえ。」

少年の言葉にちよつと呆れたような響きがあつたのは、決して気のせいではないだろう。

「で、名探偵さん。あの女の人は今どんな気持ちなんですか。」

その女は明らかに泣いている。相手の男が差し出すハンカチを受け取りながらも、彼氏の悪口だけを吐きだし続けている。

「泣いているんだから、哀しい？ いや、微かに喜びの赤……黄色も見えるような気がするんだが……」

「ヒントをあげよっか？」

少年は小夜子に三つ目の包みを差し出す。小夜子は素直にそれを受け取った。

「あの女はあ『私ってかわいそうなのよ』ってことをアピールすることで、他人から同情してもらおう事が大好きですよ。」

「ふむ、やはり幸せにはなりたくないんだな。」

「ノンノン。幸せになりたいのは本当だよ。『私はこういう幸せを理想としています』ってのはあつて、その幸せに到達できない自分がかわいそうだと思ってるんだよ。」

「ふむ、不可……」

「はいはい、不可解だよな。とりあえずそれ、食べれば。」

小夜子にとってハンバーガーは脂質と脂肪と炭水化物、そして何種類かの微量成分の味しかなかった

(5)

「……そろそろだな……」

小夜子は地上に着いてからずっと隠していたその羽を、まるで伸びでもするかのように大きく広げた。

まさしく濡羽色のそれは、明るい月に照らされた夜空のように青みがかった漆黒。まがましい闇の深淵のように、見るモノを不安にさせる美しさを宿している。

その大きな翼をためかせ、少女は哀れな女の目前に降り立った。

「ここは……」

ビルの屋上は夜空からの強い風に吹かれて寒々としていた。

少女の視界に驚きで目を見開いてしまった女の顔が映る。

「良かった。まだ死んでいなかったな。その回収に来た。」

ふと、素朴な疑問が小夜子を捕らえる。

「ここで何をしている？」

女は屋上のフェンスを乗り越えた外側、狭い空間に張り付くように立っている。

「死ぬのか？いわゆる自殺というものだな？」

無遠慮な質問を投げかける小夜子は、その大きな羽でホバリングしながら女の眼前に浮かんでいる。

コウモリが、軽やかな羽ばたきの音とともに小夜子の隣に立った。

「小夜子ちゃんってば、あんまり人間を驚かせちゃダメだよ。」

「すまん。次は気をつける。」

「それに、彼女は自殺する気なんかこれっぽっちもないよ。」

「ない……のか？」

じゃあ、わざわざ有刺鉄線で掻き傷を作ってまでここに立っている、これは……？

「それはねえ、自殺ごっこ。」

「ごっこ？遊びで死ぬのか。」

「死なないよ。彼氏が、この前一緒に飯食ってた男か……ともかく誰かに電話しているはずだよ。『私、もう死んじゃう』ってね。」

「それは、何か意味がある行為なのか？」

「あるよ。彼女にとってはね。助けに来てくれる王子様を待つ、悲劇のヒロイン気分が味わえる。」

少年は、ちよつとサディスティックな眼差しで女に微笑んだ。

「さあ、時間だ。」

扉が開き、誰かが屋上に駆け込んでくる音がした。

女は助けを求めて振り向く！

だが、そこは振り向くには狭すぎた。

足を踏み外した女は空中を泳ぐように両手をばたつかせたが、落下する体を支えるには何の役にも立たない行為であった。

(6)

小夜子の手の中には刹那に女の首筋から引きちぎった、あのペンダントがあった。

そこにはめられている件の石は青黒く輝いている。それはおよそ生命と呼べるものが、ただ一つもない深海の闇のように、見るモノを寂寞とした気持ちにさせる色だ。

「私の羽根に似ていないか。絶望の濡羽色だ。」

いつも通りの無感情に見える彼女の心が静かに動くのを、少年は見逃さなかった。

「絶望？俺にとっちゃあお前の羽根は、最高に美しいけどな。少なくとも絶望なんかじゃねえよ。」

「励ましなら結構だ。」

少年に背を向けた彼女の瞳は、石の輝きを映してしまったかのようになんて暗く沈んでいた。

「小夜子ちゃん、小夜子ってば！小夜……クルエボ！」

何と呼び掛けられようが、その声は凍てついた彼女の心には響かない。

一羽の鳥が真夜中の空へと大きく羽ばたいた。

その鳥が病室で眠る少年のもとを訪れたのは、細い月が頼りなく照らす夜だった。

閉め切った病室に突如巻き起こった羽風を顔に受けて、彼は目を覚ました。

窓辺には羽を生やしたシルエットが佇んでいる。

「天使……？」

消灯後の暗い病室の中で、外からの光に輪郭を縁取られた姿はあまりに美しい。

だが、その声はどこか事務的で、固いものだった。

「そんなものは、お前たち人間が勝手にイメージした幻想だ。」

小夜子はベッドわきの常夜灯に羽をかざして見せた。黒い羽根の一枚一枚が光を受けて黒く輝く。

「お前たちの言う『天使』は、こんな黒い羽根をしてはいないだろう。むしろ、この色なら悪魔と呼ぶ方がふさわしい。」

「天使ってことにしておこうよ。こんなにきれいなんだから。」

彼は手を伸ばして、その柔らかな羽根の質感を確かめた。

そんな彼の横顔は儚げで青白く、今宵の細い月のように頼りない。長い闘病生活の終焉に訪れた異形の少女が何を意味するのか、わからないほどバカではないだろう。だが、そんな彼女にさえ柔らかな笑顔を向ける、そんな彼女の方こそ……

「きれいなのはお前の方だ。」

小夜子は思わず口を突いたその言葉に、合理的な解説を求めた。

「この場合のきれいとは、姿形の事を言っているのではないぞ。もちろん、そこも美しいが、華やかな美しさではなく……」

少年が、ぷつと大きく吹きだした。病室に朗らかな笑い声が満ちる。

「私は、何か面白い事を言ったのか？」

少年はヒューと息を吸って、笑いで乱れた呼吸を整えた。

「そんなこと、いちいち解説してくれなくてもいいんだよ、天使さん。」

「そのむずがゆい呼び方はやめてくれ。小夜子と呼べ。」

少年が大きく息を吸って、再び笑いだした。

「お前は楽しそうだな。お前なら、私に教えてくれるかもしれぬ。」

小夜子はメンズチョーカーを少年に渡した。そのゴツツとしたシルバー製のヘッドにはめられた灰色の石は、やはりくすんでいる。

「これを受け取ってくれ。そして私に、『楽しい』を教えてくれ。」

「これは、『楽しい』を教えてあげるお礼ってこと？」

「逆だ。それをつけてくれるお礼に、私がお前の望みをかなえてやる。」

「望みねえ……」

「何でも言え。死の摂理を捻じ曲げることで以外なら、何でもかなえてやれるぞ。」

「じゃあ、お願いしちゃおうかな。」

少年はいたずらを思いついた時のように、くすくすと笑った。

「僕が死ぬその瞬間まで、そばにいてよ。」

小夜子にはその言葉の意味がよく解らなかった。いや、文法的な意味はよく解っている。だが、そこに含まれている少年の真意を測りかねていた。

「私には『そういう機能』はついていないぞ。『そういう相手』を斡旋して欲しいのか？」

「そういう？……あ、やだ、やらし。」

それは小夜子が生まれて初めて味わう『混乱』だ。彼の言葉は単純に思えるのに、何かしつくりと来ない。ひっかけ問題のようにも感じられる。

「別に『そういう』事はいらないよ。ただ僕と一緒にいて、楽しい時には笑ってくれればいい。そうすれば君も『楽しい』が解るし、一石二鳥だろ？」

「うむ？お前がそれでいいというなら……」
少年がカラカラと笑い声をあげた。

少年が最初に要求したことは『呼び方』だった。

「タケ。タケって呼んでよ。」

「そんな気やすい呼び方は、親密なもの同士がするものだろう。」

「いいんだよ。だって僕も『小夜子』って呼んでいいんでしょ？」

「そんな気やすい呼び方をしろとは……うむ、言ったな。確かに。」

タケは声をあげて笑った。

タケはよく笑う。大きく息を吸って、また笑う。

回診に来た医者に軽口を叩いては笑う。売店のおばちゃんにからかわれては笑う。そして、友人たちにも。

今もタケは見舞いに来た友人たちの輪の中で、ひととき大きな声で笑っている。小夜子はそんな彼を、つぶさに『観察』した。

友人たちはこぞってタケを笑わせようとしているかのように喋り続ける。その内容は実にたわい無いものだ。

クラスメイトの失敗談。ゲームやドラマの話題。先生のモノマネなんて裏技もあって、タケは笑い続ける。

小夜子はそんな彼の笑顔を真似ようと、顔の筋肉を動かしてみた。目じりをグツと引き下げ、口角はくいつと引き上げる。

「小夜子、ひどい顔になってる！」

タケと友人たちは腹を抱えるようにして笑い転げた。

「そうか、ひどいか。」

笑顔を無表情に戻す見事な早技に、笑いはさらに大きくなった。短い面会時間が終わるまで、彼らはひたすらアホのように笑い続ける。

小夜子だけが、その場に漂う小さな違和感に心をとらわれていた。
「お前、早く帰ってこいよな！」

帰り際、友人がタケに言った言葉に、小夜子の中の違和感は確信に変わった。

「お前は、あいつらに本当のことを言わないつもりか。」

「言わないよ。あいつらには最期まで笑っていて欲しいんだ。」

「ふむ。誰かを泣かすのがいやなんだな。お前は良い人間だ。」

タケはひときわ大きく息を吸って笑った。それは先ほどとは全く異質な、小夜子には理解できない『自嘲』の響きを含んでいた。

「良い人間な訳ないじゃん。僕は残された時間を、自分が楽しい気持ちで過ごしたいだけなんだから。」

「不可解だな。笑うのはあいつらなのに、楽しいのはお前なのか。」

「そうそう。そうして楽しい気分が僕がいなくなった後に、あいつらは僕のために泣くんだ。ひどい人間だろ？」

「お前の気持ちは……矛盾しているな。誰かを泣かせたくない気持ちは本当だ。だが、自分のために泣いて欲しい、とも思っている。」

彼は笑顔を消して、真剣なまなざしを小夜子に向けた。

「小夜子、教えてよ。僕は死んだら天国へ行くの？」

「そんなものは人間が勝手にイメージした幻想だ。死は、全てを等しく無に帰す。」

「夢も希望もないなあ。『無』かよ。……でも、本当に無になるならいいのに……」

「無になれるぞ。この私が言うのだから、間違いない。」

「そうだね。僕は『無』になるんだろうね。でも、本当の『無』には……」

タケは小夜子からついと目線を外し、どこか遠くを見るように中空を睨んだ。

それを見ている小夜子の胸にざわめく、なんだか落ち着かないような気持ち。それが不安だという事に彼女は気付かなかった。

「タケ、笑え。楽しい事をしよう！欲しいものは何でも出してやるぞ。」

彼はいつものバカ笑いとは違う、静かな笑みを小夜子に向けた。

タケの母親が病室に入ってきたのは遅くなってから。面会時間はぎりぎりだった。

息子はすでにベッドで寝息を立てている。その傍らには見知らぬ少女が座っていた。

「タケは十八時に夕食をとった。そのあと夜の投薬をつけ、先ほど眠ったばかりだ。」

報告でもするかのような小夜子の口調と存在に、彼女は違和感と戸惑いを感じた。

「あなたは……」

「私か、私はタケの……」

小夜子はタケとの関係を表すにふさわしい言葉を探す。

「彼女のようなものだ。」

タケの母親は目を丸くして、その場に立ちつくした。

「タケアキったらいつの間にも……でも、この子は……」

小夜子はそんな彼女のことを良い人間だと思った。おそらく息子の最期のわがままになるだろうと解りながら、遺される少女のことを思つて葛藤している。

彼女が呑み込んでしまった、その言葉に小夜子は答えた。

「心配はいらない、私は全て知っている。」

「知っているのに！この子と付き合ってくれるの？」

「私はタケのことを解りたい。だから一緒にいるのは、私自身のためでもある。」

タケの母親はその言葉をどう解釈したか……両の目からぼろぼろと涙をこぼした。

「泣くな。泣くと、タケは楽しくない。」

小夜子はその涙を自分の袖口で拭ってやった。そで口を濡らす、そのしずくは温かい。

「面会時間はあと十分程度残っている。母上殿は今しばらく、タケのそばにいてやるがよいぞ。」

「あなたは。帰ってしまうの?」

「私は……」

小夜子は病室の入り口で振り返った。

「いつでもタケのそばにいる。」

今宵は新月。一羽の鳥が紛れ込むには十分すぎるほどの漆黒が広がっている。

屋上へと続く非常階段をのぼりながら、小夜子はその翼を広げた。

漆黒の闇空でそのコウモリは待ち構えていた。

「よう、小夜子ちゃん。」

「何か用か。チャラ男」

「やだなあ。小夜子ちゃんのこと心配で、来たに決まってるじゃん？」

「心配されることなど何もない。」

小夜子は羽音を立てて飛び上がった。ここからはタケの病室の中がよく見える。消灯後の、やさしい闇の中で彼は安らかな寝息を立てていた。

「そう。何も……ない。」

「ふうん？ま、いいや。どう？人間観察は。」

「難しいな。人間には矛盾が多すぎる。『嬉しい』のに泣く。『怒り』を感じているのに笑う。それに……」

小夜子は窓の中の青白い寝顔を見つめた。

「その矛盾が許せないんだ？」

「ああ、許せんな。タケには楽しい気持ちでいてもらわないと困る。」

小夜子は羽を大きく震わせた。

「よりよい『楽』を、私は手に入れなくてはならない。」

「本当に、それだけ？」

「それだけだ。私の中に矛盾は無い。」

凜とした小夜子の横顔は、何者にも揺るがされることはないように見える。

「矛盾は無い……か。それなら結構なんじゃない？」

コウモリは見えない月に向けて大きく羽を動かした。

「ムルシエラゴ！」

久しぶりに呼ばれた、異界での自分の名前に振り向いた彼の眼に

は、小夜子が何だか小さく見えた。

「タケは……どうしても死ぬのか。」

「何言ってるんだよ。その瞬間がいつなのか、まで解っているはずだろ。」

「……解っている。確認のためだ。」

「運命に書きこまれた死の瞬間は、何者にも変えられはしないんだぞ?」

「解っていると言っているだろう。本当に確認のためだ!」

コウモリの目が、優しい三日月のように、すつと細くなった。

「クルエボ……お前は優しくすぎるよ。」

月の無い夜を、その残り少ない命で照らそうとでもしているかの
ように、タケの寝顔は白く、静かだった。

数日もすると、小夜子の存在は『タケの彼女』という事で周りに知れわたった。

彼女は『カレシ』のそばに常に寄り添い、その笑顔を飽くことなく『観察』した。

タケは相変わらず笑っていた。そんな彼のもとへは人が集まる。

今日は隣の病室の、若いあんちゃんが話相手だ。

「それにしても、どうやってこんな美人の彼女、捕まえたんだよ。」

「ナンパですよ。ま、ウチの場合は逆ナンですけど?」

あんちゃんは「ぎやはは」と、豪快に笑った。

「俺を差し置いて、おいしい目、見てんじゃねえよ。」

ちよつと乱暴なスキンシップに、タケは笑顔で応えた。

「僕、病人ですよ。もつと優しくしてくださいよ。」

「俺だって病人だよ!」

「あ、そうでしたっけ。」

笑い声がより大きくはじけた。

小夜子はそんな笑いのさなかにいて、にこりもしない。ただじつとタケの楽しげな姿を見つめていた。

昼食の時間になり、あんちゃんは自分の部屋へ帰って行った。

タケと小夜子、二人だけの病室は静かだ。

小夜子は昼食を頬張るタケから目をそらさず、唐突に聞いた。

「ちゅー位はした方がいいのか?」

タケがゴフッとむせた。

「ちゅーなら機能的にも問題は無いぞ。私は『彼女』なのだから、そのくらいはした方がよいのだろう?」

「その言い方は、萌えるって言つか、萎えるって言つか……」

「どっちなんだ?」

「いや、いいよ。そこまでしてくれなくて。」

小夜子はずっとタケに詰め寄った。

「ならば、何をすればいい？何をすればお前は楽しくなる？」

「今のままで、十分楽しいよ。ほら、僕、笑ってるよ。」

「ウソをつくな。お前は笑っている最中に、すごく哀しそうな顔をする。」

タケが力なく「ははっ」と笑い声を吐いた。

「良く見てんなあ。敵わないよ。」

「あれは、楽しいのか、哀しいのか、どっちなんだ？」

「どっちもだよ。」

「どっちもじゃだめだ。タケには、楽しい気分でももらわないと困る。そのためなら何でもしてやるぞ。何をすればいい？」

タケの首筋で、チョーカーの石がチカリと青く光った。

その光はタケが小夜子に向けた、とびきり明るい笑顔にまぎれて消えた。

「じゃあさ、もうこれなら絶対楽しいって、鉄板の物があるんだけど。」

タケは部屋の隅にある冷蔵庫からカップのアイスを取り出すと、小夜子のすぐ隣に腰を下ろす。

「これ、ちょーうまくってさあ。でもなかなか売っていない、とっておきのレアモノなんだよね。」

「それを食べると、楽しくなるのか？」

「美味しいものはさあ、誰かが一緒に食べてくれると、もっと楽しくなるよ。」

タケはその、ひと匙を小夜子の形良い唇に流し込んだ。

いつものように成分を味わっている余裕はなかった。小夜子の口の中でとろけていくそれは、冷たく、あまく、そして、タケの笑顔がほろ苦い。

「うまい……」

小夜子の言葉に満足そうに頷くタケをみていると、何だか鼻の奥がしょっぱいような、そんな気持ちになる。

小夜子は意味もなく窓の外へ視線をそらした。

月はもうすぐ満ちる。中途半端に大きな月が小夜子の黒い羽根に反射して、タケの寝顔に黒々とした影を落とした。

昼間は元気にふるまう彼が夜中に強くむせ込む姿を、小夜子は毎晩のように見ている。

そんなとき、彼女は小さなズルをする。彼の眠りを妨げる呼吸をその力で鎮め、そつと髪をなでてやる。

その眠りが、せめて幸せなものであるように……

だが、今夜のそれは違った。

彼は咳と共に大量の痰をコポツと吐き出し、体をおこした。深い喘鳴と、激しい咳が彼を襲う。

「タケ、タケ。苦しいのか。今、私の力で……」

そうしている間にも、彼は緋色の痰をコポポツと吐き出す。

小夜子は生まれて初めて『狼狽』した。タケには月が満ちるまでの時間が残されているはず。

「タケ、しっかりしろ！ まだだ！ まだお前の運命は終わりじゃないんだぞ！」

小夜子は自分の両ほがぬれていることには気づかなかった。

わずかばかりのタンパク質とリン酸塩が含まれた、この液体がなぜ、こんなに温かいのかは解らない。解らないが、小夜子は確かに泣いていた。

発作が治まったばかりの疲労しきったタケを、小夜子は抱きとめていた。

「小夜子……」

彼は震える指でチョーカーを外した。

「これ……返してもいいかな？」

そこにはあの灰色の石が……今は灰色ではなく、赤、黄色、青、

そして緑へと、くるりくるりと色を変えながら輝いている。まるでシャボン玉のように透き通った、それでいながら、しっかりとした石の質感が彼女の掌の上に在った。

「これは……」

「これ以上は、楽しい気分でいられそうもないからさ。小夜子も、もうここへは来なくていいよ。」

「そんな勝手な言い分があるか！」

「僕は勝手な人間だよ。解っているんでしょ？」

その言葉はどこかとげとげとしていて、普段の明るい彼からは想像もつかない絶望の響きを含んでいた。

「みんなにいい顔しているのだって、自分が楽しくしていたいから。苦しくないふりだって、自分が可哀そう扱いされるのがいやだから！それにねえ、小夜子……」

彼は小夜子の手を引き寄せた。

「『楽しい』を教えてあげる、なんて言ったのも、天使と友だちになつたら、もしかして奇跡を起こしてくれるんじゃないかな……」
「て思ってたんだ。」

彼の手は優しく動き、小夜子の肩を抱き寄せた。

「でも……やめておけばよかった。小夜子は優しすぎるんだよ。小夜子……僕は……」

それ以上言葉は無く、彼は静かに泣いていた。

小夜子はそんな彼の背中に優しく手のひらを押し当てて、祈りを捧げる。人間達がどの存在をさして『神』と言っているのか、彼女には解らない。解らないが……

（どうか、彼を助けて……）

そんな想いを軽く嘲笑するかのように、室内には起こるはずの無い羽風をおこしてコウモリが現れた。

「祈り……かよ。無駄なことしてるねえ。小夜子ちゃん。」

小夜子はタケをかばうように、腕に力を入れる。

「何しに来た。お迎えにはまだ早いだろう。」

「いやいや、あんまり茶番なんで笑いに来たんだよ。そんな祈りを聞いてくれる相手がいない事も、運命は絶対に書き換えられない事も知ってるくせに……」

「タケにそういう話を聞かせるな！」

「小夜子、僕は大丈夫だから。」

タケは小夜子の体を柔らかく突き放した。

「もう、行きなよ。」

「そうだよ、小夜子ちゃん。立派な石を手に入れたじゃん。もうここには用は無いだろ？」

小夜子は手の中で透き通った光を放つ石を、そして涙でぬれたタケの顔を見た。

「まだ行かない……この石は未完成じゃないか。」

小夜子はチョーカーをタケに突きつけた。

「苦しくてもいい。哀しい思いも平気だ。私はタケの全てが見たい。タケのきれいな思いも、みつともなく生きあがく姿も、全部私が覚えておいてやる。だから……」

月明かりが雲にかき消され、小夜子の涙を隠した。

「最後まで……私はここにいる。」

温かい雪

空に張り付いた銀盆が夜空を濡羽色に照らしている。

夜空と同じ色の翼を広げた小夜子は、病院の屋上に所在なく座っていた。

満月は、タケの笑顔によく似ている。寂しげで、哀しげで、それでも漆黒の闇を照らすと輝く……あれからタケは苦しんだ。衰弱していくおのれを持て余して怒り、嘆き、わめいたりもしたが、最期の瞬間に彼が浮かべたのは、やはり笑顔だった。

その笑顔を胸の内で反芻しながら、小夜子はタケから回収した石を手のひらの上で転がした。それは月の光を反射しながら時に明るく、時には暗く輝く。くるりくるりと色を変え、静かに輝いている。

「赤……黄色……緑……」

どの感情も決して混ざりあうことなく、反発することもなく次々と色を変えるそれは、まさしく矛盾を抱えながらも輝く『人間』そのものだ。

飽くことなく石に見入っている小夜子の隣に、コウモリが舞い降りた。

「小夜子ちゃんお待ち。終わったよ。」

「そうか、終わったんだな。全て……」

そんな彼女の顔にはすっかり、もとの無表情が張り付いている。

ムルシエラゴはそんな彼女に、おおげさなため息をついて見せた。

「『死は等しく全てを無に帰す』だっけ？まだそれを信じてるのか？」

「信じるも信じないも……タケはもういない。」

小夜子の眼差しは手のひらの中にある小石の輝きだけを、かたくなに映している。

彼はそんな彼女の視線を奪うかのように夜空に手を広げた。

「見てごらんよ。」

人間の目では決して捉えられない風景がそこにはある。異界から吐き出された七色に輝く粒子が、まるで雪のように地上へと、降り注ぐ。

「あれは再利用の過程で出た魂のかけらだよ。」

かけらは静かに地上へと、生きているモノたちの上に静かに静かに降り積もる。

夫だった男を亡くした女の上にも、怒りっぱだった上司を亡くしたバイト君の上にも、片思いの相手に逝かれてしまった男の上にも

……

「人の上に降ったそれは、楽しかった思い出だったり、哀しくてやりきれない思い出だったり……さまざまな感情となって地上にとどまり続ける。」

息子の冷たくなった手を握り締めている母親の上にも、静かに、優しく……

「小夜子ちゃんの中には、もう一かけらも、タケ君はいないのかな？」

小夜子の翼の上にも、ただ優しく降り積もる。

「タケは……いる。」

小夜子はぎゅゅと石を握りしめた。

「あいつを思い出すと、痛い。苦しい。消してしまいたい……でも、温かくて消せない。私の中のあいつは矛盾だらけだ。」

「矛盾しているのは、タケ君じゃないでしょう。」

「そうか、この矛盾は私の物か。」

「不可解か？」

「もちろん、不可解だな。だが、私はこのままがいい。ダメか？」
少年はいつものようにへうたとわらった。

「いや、いいんじゃないの？」

大きな満月が柔らかい光で小夜子を照らしている。あの月は本当に……似ている。

小夜子は月に向かって、目じりと口角を柔らかく歪ませた。

「わらった？いま、笑ったよね？」

「何を眠たい事を言っている。帰るぞ。」

濡羽色の夜空に一羽の鳥が飛び立った。夜空と同じ、強い青を秘めた黒色の翼で……

月の光の中で楽しげな笑い声がしたような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2288z/>

真夜中の烏

2011年12月25日12時53分発行